

滝
尻

三指式
三指式

番外書冊

漫筆雜考

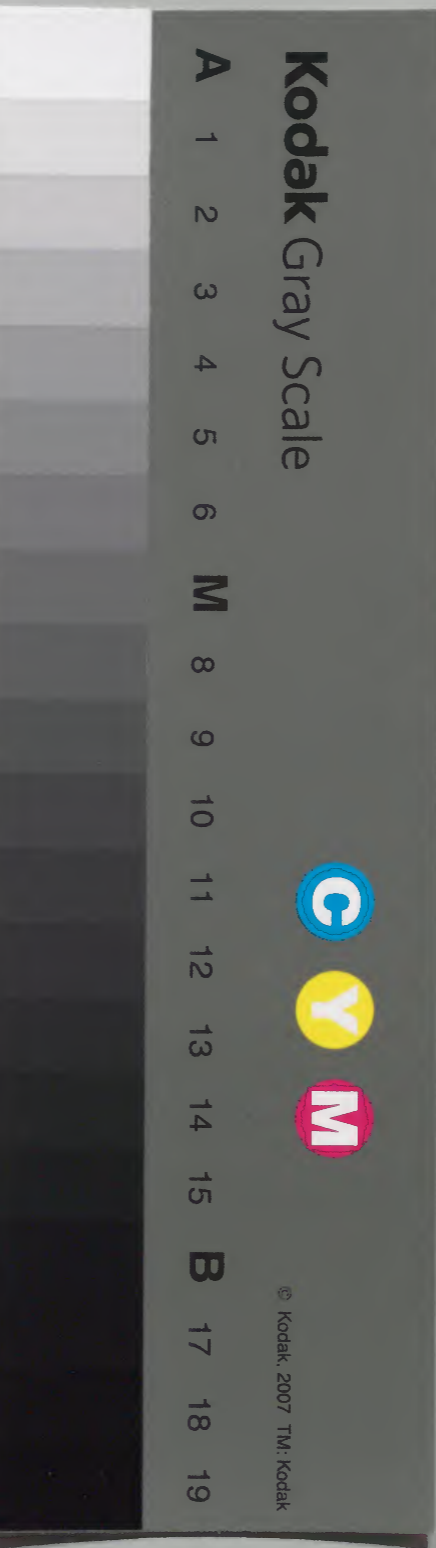
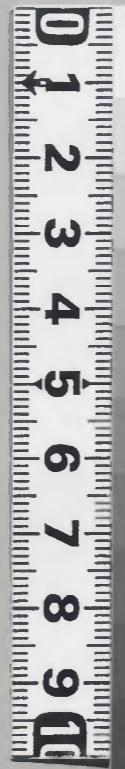
和書門			
二〇七	六八	四	類
二八八	冊	架	函

庫文閣内	
二〇七	和
二八八	書
三〇四	類
架冊	函

(十二才)

内閣文庫	
番號	和 20784
冊數	28 (16)
函號	211 304

000000



一 大泊家二十余彩人共流没

一 小泊家三十余彩人共流没

一 彩宮城大キ被_レ破_レ所_レ瓦_レ氏_レ家_レ大_レ槩_レ顛_レ倒_レ

一 男女死_レ人_レ七百三十口人

右_レ一_レ百_レ口_レ一_レ晩_レより_レ六_レ百_レ退_レ以_レ波_レ野_レ尻_レ村_レよ_レ引_レり_レて

私_レと_レて_レ並_レ路_レを_レり

一 畫_レ工_レ事

巨勢金若 大納言 仁明帝の時の人 之清源殿乃

繪_レと_レ幸_レと_レ云

金若子 金村 相寛 公忠 公氏 お積_レて_レ後_レと_レ張_レ草

紀金品 法名四深 舒日_レの阿_レ圖_レ梨_レと_レ稱_レせ_レる_レれ_レ

綜合の妙也 宇多帝の時乃人

賢真 金品の子 慈雲坊と稱せり

持野圖 佛像の妙也 後冷泉帝の時の人

右三人はれは世よる年一画りきりしてそるをそり

やもすれは並ゆれはる畫工印章辨王集と云て無

知_レり_レ或_レ人の曰_レく作_レと_レ云_レ画_レ工_レ代_レり_レて_レ組_レハ_レ右_レ如何

善_レ是_レ檀_レ中_レ納_レを_レ甚_レ良_レの_レ高_レ皇_レ夫_レ后_レ宮_レ大_レ進_レ為_レ經_レ疏

寂_レ紹_レ大_レ系_レ信_レ子_レお_レ宗_レお_レ丈_レ隆_レ信_レ 被_レ中_レ也 と_レ世_レ也 と_レり_レお_レと_レる_レ隆_レ信_レの子

信_レ実_レを_レ子_レ隆_レ信_レ 寺_レ門_レ院 の_レ母_レの_レ人 を_レ子_レ隆_レ親_レ代_レく_レ隆_レと_レ張_レせ_レる_レれ

武人の文を以てあはぬ花英とするとすこしといふ似
けなきりさきと或老人のまひゆり

○前將軍家御中陰東叡山よりおちりせりふ

正月廿二日靈柩上北へ入御すしして同一日

より御葬送准后宮一品法親王 公命事を執せさせりふ

翌日より御速夜の入堂二月初日御初七日の御法

會二日二日二七日のちの二七日六七日八七日九日

み七日十日十一日十二日十三日十四日のちりさとりや

十五日十六日十七日と擧せしめて事終り侍りしと見え

由墓志などには大寺願信篤命とありしと見え

○二月十日比ハ大納言家 御衆五之きより一ききしに

淨光院薨去なり廿一日 御弟清親家御衣冠に依後

御傍御弟と云々 今度御家より 勅せしめて下向

のんてい

勅使 菊亭内大臣伊季云 仙洞使醍醐大納言昭尹に

東宮復小川城申御後法々 女院使後少路宰相有胤に

宣令使平松少納言時春 副使少内記

勅使に溝口伯耆守 仙洞使東宮使に大村能成也

女院使より御行をなす事官使より前田宗女代り坊山守に大准后

の御使より織田監物等より御食せさせりしと見え

○尾品斯波の故案のりんり又枝三橋あり廣井の
八幡古神堂大概ニッ橋之かり斯波の庶流牧氏の後
と又ニッ橋あり

斯波津川牧三家畧系畧 如左

△斯波右衛門督義良 尾張屋敷清須城主

斯波治部大輔義通

斯波右衛門佐義録 三松軒

津川玄蕃允義冬

津川弥太郎義長

牧下野守長義 尾加春日井郡川村城主
母牧左邊女

牧子三右衛門尉長清 尾品愛知郡小林城主
法名梵阿 妻信長妹

女子 細井樽之助妻

牧喜右衛門尉長治 法名休菴
春日井郡長久手村住

牧右衛門四郎長正 實ハ長清才
母長久手ノ領主加友大郎在焉正元女

元龜三年三月三方原ノ役屬林系小卒大發功蒙上臈丹羽六次又酒井
与左郎奉ノ授長正飯演松而死四二歳ニ法名善祝

牧助右衛門長勝 初ハ又十郎長次ト云

勢而大沼ノ後十六歳其后屬滝川一益甲刃天目山ノ役弘長功
一益入于野山ノ後其仕 家康公從相易小田原二千九歳ニ
慶長十四年六月奉命奉尾加古屋城地繩浪ス

牧助右衛門 牧下野守

牧内記 奉仕尾公

○尾品丹羽郡稻木ノ庄大山城之歴代 大山中世以筆
妙法院門主の傾けりし永享の末より斯波氏主統一
て家臣織田氏願之

斯波元勳 始て城上 御廣ノ中子 織田重信 法名珍山 常宝

織田信常 信安 常永 後 織田源正 信定

織田大和守敏定 前 織田九馬助敏信 法名常世

織田五郎信康 法名泉藏 津田土希右衛門信津 法名勘吉 宗信

池田勝三郎信輝 法名勝入 織田源三郎信房 初勝長

中川勘右衛門定成 信雄

室成越州筆北城と云て飛山と入然して退散の時

比原平兵衛と宮せりし時定成を質借某とて

大山の城をせりしもの初池田捨入被取事と城とを

再ひと云

池田捨入 加賀寺守藤景 初信正

氏秀入江常閑 実白秀次ノ実父ニ初称也 尾成秀吉右衛門

三好宰相秀俊 秀次ノ 三輪出羽守 秀次ノ臣

三輪右衛門有造 秀次ノ臣 石川儀前守光吉

北條左衛門大史氏勝 松本右衛門允忠頼

右二人 室子系後吏守城

小室系和泉守三次 三位中将 忠吉ノ臣 平岩守行氏親吉

成瀬隼人正正成

成瀬隼人正正虎

成瀬隼人正正親

成瀬隼人正正輝

○勢田社大宮司及び祝師物授授等袍の致相行と角也
 凡相行ハ皇家の御袍よりを織へきに如何しと地下此
 相友用とやと問人傳りし予曰法社の神人位袍の致多
 くはと社の神衣をヤトトして為し傳るる古くその
 ちりきり勢田の祠官も又然り蓋正正年勢田
 の社遷宮の時之文書今多く田舎家より傳るる曰
 勢田太社宮就于御遷宮祝師役と傳り
 一 於于社前七日是よりして大宮八咫宮妻社の所ちつらひ

をそののくハハ新用指費文

一 祝師は衣束のつら指費文

一 傳り元は衣束のつら指費文

一 且ね方より前後の礼儀指費文

一 御遷宮よりして御社の御世衣束祝師へ納メム

は兼一條より御衣束と御服しとをせしるり

けし官司及び物授授等も御服の例ある自の

致りも同じしと云ふ

○又同大宮司法事と主祭を祝師家と物授授と
 とは信也河 吾今のとき官司より一在田舎と場の

あふら、年老も信て史二三在もあし、信但近世まで

○宮目も年を治中にて尾張氏と史産し、らめや

古状の中にもあり

今度東脇大津右出礼談し、年事いひ、りめ

一五批判一、一、宮中の事先、り、り、り

大津らお、り、り、り、り、り、り、り、り

と成り、り、り、り、り、り、り、り、り

七月廿六

依るり出、り、り

赤川ら、り、り、り

村井、り、り、り

治田、り、り、り

祇師殿

千秋殿

惣檢校殿

ら、り、り

昨日、り、り、り、り

右の古状、り、り、り、信長との、り、り、り、り、り、り、り、り

年老、り、り、り、り、り

○侍の礼服、素襖上烏帽子小サロ

畧の時懸素襖、袴、り、り、り、り、り、り、り、り

足利家の末までかくありし享祿お後より多き
つとくを月ひし今この袖の上下のちり所り
かこ夜のむごい平信長とのいふありし先由
織田貞置を人徳しれりし

○洪武故事云角觥六国脱所造云角觥注云戦国
脱講武以為歳樂相誇角其校力以相觥テアラソク脱スト云
今の相撲也

○建武延元の比絨布国黒丸の城を黒丸入后是性と
し老と是館倉廣京之但る国より絨布性て是種
たる丸の館より館倉氏絨布に信せり初之後

○斯波家のお老より館倉氏をいへる孫

○丈性古に在日の号あり中比佐史及び朝臣園と
よそ地を語りて吾家より目をなして主従せり
是より國衛吾家の政と在園と在日の令をあらし令せ
られし吾邦の地を封せりしに似たりされども徳院
諸宮親王大后の御封に在りしは是も友府を
治りて是地の三程をあるむりしめて是は皆吾家乃
ま替ありし中右より在園とて不輪の礼をよそ
玉目不入の地多ありし在田舎と字ありしは
在日其の官某のち臣の御在園の目人といふなり

新朝の後、亦くに地改と云ふ者を立てた日の号を
是と御司保司と稱せし是より武家も御司と
申して古の姿はあつたりしはれども又今の如く
教那を統へ國を治したるをせしむるはありしを氏
天下に推して取つて後玉と稱れて大軍を以て他を
撃つに自由のありしをせしむるは多かりしはよ大石
亦くに出て来て中比の風俗も変へぬまより必らず
子孫を玉と有して今も傳へたるも或は形も余
して玉形も揚るも多し今のこときいなりし
徳候と封建しりふと号しし傳へしや

○朝野群載二十卷は唐憲宗我玉のくよありし
位記あり是が邦友人の湯ふ位記に以て刻し其
るゆりけし其文あり

日本国判官正五品上兼行鎮西府大監

高階真人遠成

右可中大夫試太子中凡餘如故

勅日本國使判官正五品上兼行鎮西府大監高階
真人遠成等奉其君長之命越我會同之礼越溟
波而万里献方物於三陟所宜褒將錫班榮可依前件

唐
元和元年正月二十八日

中書令

溯

中書侍郎平章事臣郇綱宜

中書舍人臣盧景亮奉行

奉スル

勅如右牒到奉行ラ

元和元年正月日

檢校司空兼侍中使

門下侍郎平章事 黃韋

拾遺中登

○ 月日 侍都事

左司郎中

吏部尚書

吏部侍郎宗儒

尚書左並平章事左中書

○ 告日本國使判官正五品上兼行鎮西府大監高階真人

遠成奉スル

勅如右府到奉行セヨ

負外郎次元

主事栄日

令吏惣初

書令史

元和元年正月 日下

かゝの工々々申せり件の心申内記局より一り
後南所より一りしと一り右の内記字を
申しにせん也

○今度取替門達形似目よ申お達二は願旨
大樹么歳令由此字よ一は畏悦系入は仍るを究
也此也

八月廿七日

花押

一条前関白殿書なり

○今般家願お統し申し蒙給令し申お申り改る

少運し申し他は思給は仍以一管申せよは證し

仲秋廿七

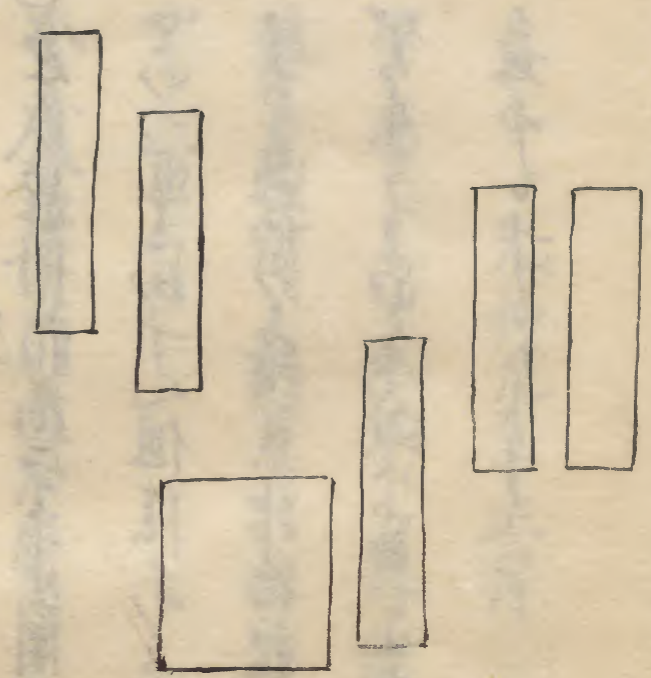
花押

近衛美白殿書なり

○右と右通卿へ申し申すに申宛右へとも尾張有善信智友
と申り

○色紙経冊粘紙ナシを申す申す角次よ申す角次く角申す

こころ返も申すは但後あはは申す申す一は歌は
ま夏秋を難直申給紙教書旅次よ申給よとも
加申すも申す或ハ申す一は申す申す申す申す申すの部
意申す申す申す



○已亡五月廿日天晴園東御昇進同日詔家御饗魚棧樂

勅使 高野權大納言保春卿庭田前權大納言重條卿

宣旨御使 押小路大外記 土生官務

告使 山科民部大丞 副使 青木九千門尉 青木右三平尉

仙洞使 梅小路權中納言共方卿

東宮使 鷲尾權中納言隆長卿

女院使 滋野井宰相公澄卿

中宮使 外山前宰相光賴卿

大准后使 文野三位時香

御衣紋 高倉前權中納言永福卿

御身固 土御門陰陽頭泰連朝臣

御衣紋御身固等八御黑書院卜云

上首

二條右大臣綱平公

近衛左大将家久卿

宣旨御位記之目

征夷大将軍 右近衛大将

右馬寮御監

淳和学两院别當 二通

源氏長者

右六通 官務方 監箱 青木九門尉

内大臣 正二位 御位記 大将叙留

隨身兵杖牛車

右五通 外記方 監箱 青木右三尉

右御廣間 出御 遣使進^ラ庭上呼御昇進^{ニ音次}

勅使院使等進^云右大臣以下御太刀進上宮^云家等御使

○畢而二條家近衛家之雜掌並樂人物惣代御冠師至近

奉拜云

今日公氏有官^云面皆未常

○五月三日堂上方御饗食應^云棧樂

翁 ^{三番三} ^{仁右云} 用口 棧右云

丈夫なりく地^云く^云け^云松^云乃^云け^云む^云ら^云く^云た^云り

み^云と^云り^云れ^云さ^云た^云る^云月^云こ^云ろ^云民^云走^云は^云り^云し^云く^云目^云出^云度^云り

り^云の^云御^云代^云と^云り

之^云の^云御^云代^云と^云り ^早 棧右云 ^云右云 ^棧右云

田村 ^金又七 ^長右云 ^長右云

東北 宝生

初次帝

市帝

在帝

江系 合副

次帝

三帝

次帝

祝言 吉吏

次帝

次帝

次帝

相云 未詳

仁帝

○月十六日尾公能公水戸公於秋九但もる喬朝之家合盟

ト云

○前將軍河治世時二家之公於城田筑也

一宅合盟也豊臣秀吉衆奉行孝時合諸大名

合盟自此初也

○同日廿日 尾公能國 上意 上使大保 賜長光御刀御馬

一匹時服二百白銀千枚伽羅一本 云

○文氏と友人の在次いぬ位の上は位は依て席をとわす

同位は授位のを後よあさうして在次は位は下は年老

次の上は位は今の宣法也

○凡位は叙もるに後位下より後位上より昇り正位

中に昇り正位上よりつむるも不能是右の帝及乃

尚位もるれのを却てらねり後位下に祓階をさす

能きれゆもあより又正位上よりつむるも不能これ

皇太子傳中誓いの中位大赤の尚位もるれのを却て

後三位は祓階をさすの宣下よりは是位下の

少もあらず、堂上の家とて同し。今年己巳の補任と
するに正位上右大弁二方果下洛尚房右大弁一人正位上右大弁表松
重光中弁法皇活房中弁二人より外あり。季世とて大
弁友の重威たるより、正位上とす。のれ

○西京正法山妙心禪寺の地首は籍田の地なり。後以在
に擬して宮殿を建て花園と活なり。府の人花園乃
難宮と稱せり。延在中田跡せり。白河院の御宇園と
いそた府有仁公より賜ふ。沈敏を定て慈居せり。世
是と花園の亭とす。花園は白河の
稱せり假山園圃奇樹名花西都
の一仕観たりし。一旦多る厄して烏有とす。なり

延慶帝は此より難宮と嘗てあり。花園の直事とす

○花園院 花園は白河の
稱せり 吉世の先帝の時上皇 花園
帝 中園と稱て蘭若と

一岡山和尚よりて岡山より祖とす。上皇は藤原に移り
たり。或は藤原院
と稱せり 吉世より玉鳳院を建て仙居とす。大内

義弘を建てて時寺産を没せり。應仁元年の
大乱より曠墟とす。なり。とす。乃英知り寺
祀よりん。

○晋陵 欠 晋陵宮の人の
とす。は是也 かる信居も多し。まればは朝ハ

うの事にもり。がめあり。鼻搯子平ハッナラフナイ細包代秤目のりたは
凡儀とす。ハ
負楸打敷のなまきつがく
是卓礼のみす 貫曙とらりらと
とす。

○補三成よりいふまゝありとありて軍宮成良親王の

講を避てまきけと唱るとも又朝の字公家多々

ありと傳へてあることと唱ふる也但しききして宣はる

るも傳へず織田信雄とのぶつと唱へるもつと

傳れ共又のぶつと唱ふるも傳へらるす公家多々は上より

つれいふと傳へるにあればと傳へ正親町頼隆も信雄は
實雄サ子等の也

初のぶつと唱へるもつと唱ふるの時よりつと唱へるも

つと名花山院おちつと宣へたの流と云

○清海と石比呂の史の判字ありてあひとくよむつれど
トワ字と上聲よりつと唱ふるも古史と古史集

○の序ヤトとつとトの字と上聲よりつて傳へるはと一段
ありとつと勅修も一位敬傳へるはと云

○或人曰朝廷の御儀式の中使膳の判友を列在罪

人と刑する体より白布を纏てりシモトの者シモトの首よりシモト様と

○つて打すの事す暗この罪人よりある者ハ殺す山の氏家

宣へてまつるもの名を海とてゆふものなりと

昔は苦駄政よりくハ〜延喜式に千九因獄と云ふ

六月の政あり三月七日とほりたるハコト昔ハ實の犯罪の者ハ銷鉄又ハ盤枷テラセと云

て東河系とてつり〜つと今ハ千々事すといふものなり

○尾品の信よ初草あをちと傳へばと云ふはよ赤きと

○古事と二種より其をあらわしつゝあはれをいふこと
にして又たけのこをいふこととをいふこととをいふこと
といふこととをいふこととをいふこととをいふことと
あはれをいふこととをいふこととをいふこととをいふこと
のこをいふこととをいふこととをいふこととをいふこと

○平信長補使の存よあはれに北のありしと名自秘為
馬十二匹と屏風を描せりいふ彼北の事と申す
あはれをいふこととをいふこととをいふこととをいふこと
の彼は物とて我大納言あはれ揚るれはし

○此れ友人堂上の列よ加ふ耐道退とらるるをたて
三位と存とて共二位とありて昇殿す

○補任と扱ふに大中長景忠に延宝二年六月二十日
進從三位同日郭松
権大副天和四年二月九日道退同日十一日
聽昇殿貞享二年九月十日復叙從三位

○唐朝よ十部の樂をいふこととをいふこととをいふこと
燕樂 法高 西凉 天竺 高麗 龜茲 安国
疏勤 唐國 高昌

○我國よ傳へし樂は中あはれ
同十番或ハ十種香といふは何を集くる香を言ふ印海
と扱ふことと

梅檀 御選 沉水 蕪合 薰陸 欝金 ウツクシ 白膠 青水

大香ニ 雨令陸 其松 鷄舌 丁香

○群書類要卷ノニ庶民嫁れの際より上戸八瓶下戸二瓶
と云ふものと民アの上戸と云ふも瓶数多かりしと云ふ飲酒
の多きと上戸と云ふも下戸と云ふも

○處已發言語曰于言干中アナル不如一嘿百巧百成不如一松

○居官發言語曰富不親兮貧不疎兮此是人間大丈夫富則

進兮貧則退此是人間真小輩 事林廣記

○佐大寺家よりかお波をいふと云はれは是は是は是のそ待
育れはははと云ふははははは人の商こと云ふのおははのそ

人姓名を言新格述の八當分の部より系傳尹と云

○織田信雄と母よりブチと後ハこれ初信意と名掲し
信雄と改られし後もブチと云ひし一ツカツと後ハ
なりと古記より云ふ 同官格入 信書等 然るに或ハ北畠權中納言

具教の實子と信意と云ひし一人ありしと云ふ

況ハ此ハ 信意信雄 信雄北畠の實子とあり初ハ具教と

稱せし 具教の實子 妻と云ふ 北畠系圖 寛永十八年所撰 具教の實子也

兄弟ありしと云ふ信意と云ふ一人ありしと云ふ

但法皇御子具教の子信意改信雄と云ふ親顯長

八年に生ると記せり

○異姓右衛門督大既示

近傍信尊公 後陽成院皇子 一條昭良公 信尋公

正親町季季 孫重保男 持明院基定 古良義明男

以上友氏

庭田経資 白川雅陳 後京永春男 廣備豊忠 久我通右男

以上源氏

東坊城登長 後京為康男

以上菅氏

氏家大既示

保科正之 秀右公男今至正信朝臣後松平

岩城貞隆 依行源義重男 上秋 長尾氏元平家輝亮

久松 左京永定勝楊松平故曹源氏 松平中務右忠明 貞平信昌男平氏

本多中務右捕忠國 松平利直痛友源氏之男 本多源左助康俊 酒井源右次男

小室素直 酒井忠次三男 秋元但右喬朝 戸田山城守右昌男

牧野園防右康重 中元園防源義宗宗資男 大井山城右利忠 稻系誠智正則男

内友左殿政貞 右方守女源男 内友若捷右 依澤園防右友言源男

内友渡河右信長 水野源守三男 松平右衛門左三綱 大内右秀保男

松平丹波右康重 中村平田左友介後京氏也

松平因防守忠次 中村平左近 相馬景書右宣胤 依行少右源友虎男

石川左衛門忠能 大久保左衛門 服部中務右備安政 堀田信俊正盛男

板倉頼母小出友宗

英利男

九鬼玄祐松平信房

男

九鬼玄相柳生清三郎

宗在男

九鬼玄助戸田在昌

左衛門

堀尾忠親近江守

男

西尾丹波酒井重忠

男

増山玄祐形原左衛門

資祇男

市橋玄邦溝口泰系

左衛門

名目治儀服部治隆

安昭男

高木玄祐在宗

徳田玄昂

柳中常日友

男

右二万石上徳家也他ハ皆畧之

○武家幸路五百石と稱するは同日と稱して執事とするハ

天正十一年正月九日信長公の城にて信長公の令

に依りて始ると云

○武家正月サキと云ハ天正の以迄ハ爆作サキヤウと稱し右

の武士と云はては終りにかぎりて一と云ふは

火よりけし物と云ふは一同と云ふは

馳せせりて是を幸路の従者とせし又其の

馳せりて是を幸路の従者とせし又其の

今古き能くもて要るはけり類蓋カサの名今ハ

なり一由れりては初りの由り也

○推の系は友リル上ニ餉カネ云大正記

お友とハ姓古本の家と稱して食と云ふ

盤イタもたしと云ふ

大抵之内宮の所饌ハ今も土器と柏葉を以て供
しむる

重書之なる者

- 無任國師ハ姓ハ平氏ト云一條 先文書
- 古事海府ヨシ喜雷ト云一條 口書
- 和州多氏年ノ非像被列表ト云一條 口書
- 漢波集ノ梅と梅と字判口ト云一條 口書
- 水鏡ノ欽明帝ノ御討ト云一條 口書
- 東園子系古ノて毎歳大晦日ノ夜ト云一條 口書

○ 中比流経師ト云一條 口書

○ 母衣ト云一條 口書

○ 春日井那批把治船ト云一條 口書

○ 秀右左衛門城ト云一首御せト云一條 口書

○ 或人問りくノ故ト云一條 口書

合十一條

右ノハ此座巻三ノ申に更り出む事書是仍も字
除ハ断前より出スゴトシ

天明八年戊申三月廿

多賀常政識之

塩尻卷之三十一

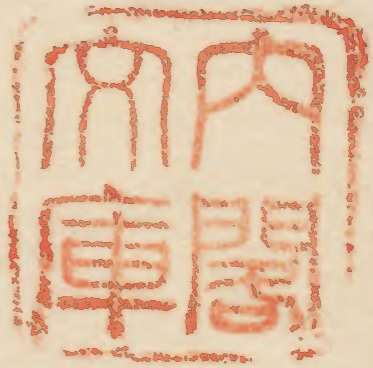
○塩尻卷之三十二

日迅

○撰而を庫川^漆醫王山廣巖宝勝禪寺に託正成
戦死記に正徳二年四月難波法泉寺の珂然和尚筆
之廣巖現住祖瑞師志願を發し一冊二年六月廿日
彼戦没の諸靈の爲に流と云し一觀喜懺を修しそ
永く定式とせり

○此日己卯辰とよくききりふに辰をききり日とよ
まし極月に入て辰九百余文とあり辰十の泉同に充つ
其邦も又辰のそり下りるといふ人其日株宏の自知





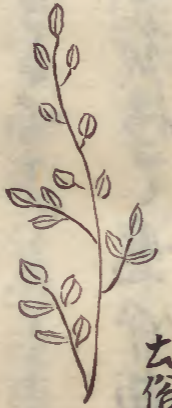
跡よたると二首後とつるや下河後百文と後十の由
準るとつひて石浦後を後賦とられりらこつてあそ
も時よよりてき抄るるを初一

○はま^三月^廿府下富士坂所後名氏のつふれ井と堀修
りしにふ面ひりきりあれたる糸巻とすといふ
く堀修とゆふとつらととせは羽の尾とあり
杉庭とつらつら移り砂眼影とつらつらと日々に
出づる堀夷よりあつた合と一般のあつた後伏たあり
て流をた目とあるよや

○四月の辰よりなる路^上坂^の山^の野^の中^の麦^の実^の穀

とつらつらみつて村民の家多く合とせり形條の
自然穀のこく穂つとせりつらつらと色白く
味も麦に似つとせり又荒草は天物といふきりも

圖たのこ



去信むきとつら皮とそれハ
麦のこく色もはる

右ハ七卷より抄出也

忠寄按ニ
佐原百卷余
アリト云人アリ
七卷トアルヲ
見レ此一部ハ
振書カ殊可

○人家より多し一ををり夜睡り夢をれば帥一是れ
會と欲一健たれば淫とあつたる辭とつて戯れ
ねつらり如く或は怒りて確らり如く他より移りまあるあ
われたつて争ひて留と罷噴醒酩たりかして老き

ヤニシノ
キンナシ

つげりりちいにかさるるのきみされと心持きかぬ人いまだ

えするさるのきみよくこそそそそ袋よ納付りてそ

きりあつめらさすうさおのたれらりり



○享保九甲辰六月廿一日京都も降 せきし敷すんし藤のし多し

色白くる尾の細きり如し

其日りのて悪日にしと毒あつと街尻をり井よ蓋せ

市も多りりし又悪凡吹をよつとは災厄しりともひ

し未の別をりり夕夕とて後水の毛をりりふと合府

おなりり或云まはら雷のしりり写訪せり是に大流是

しそ天敵夷し光耀の散り凝て毛とたつるゆあても

りりしは夜もかつるゆあてはわ白雨地を洗ひけ毛を乳

いせりもとらふ

しらの比そりるえん尾府よもも毛あつりりとして捨ひ

しりりるえんれい池ありりりりり

右に百十をよりおねを

○雅波よそおひりりあつりりおね塚の田よ多きかた

りり園東よそいられとかりりりりりりりりりりり

そのつと細川三将

富土よえんりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

と飛せりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

富土よえんりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

忠壽云前二
元如く時尾夏
有年事信三
字句一十九
スレハ一部
活板中也

と名和がハ一字をそらつれぬ事なる所なり也

○大和國耳市山郡梅根としり一隠士ありし世に
仙人の夢に沙汰せし呼子も此秘を知りたてて人
せし後或官家より古くにかきあちて先ぬ

耳なり此山と云ふもやよふこころたゞ雪と道れ信身ハ

と藤子よ事のことせしといふの如身なりけむ

○我中婦眉郡鶴坂社社の祭りよ初夜祝詞を宣ふ時
一師の娘女を年らつる男の教をもせちりてとて女の尻を
撃つ是をちりしちの祭りとよぶ

○顯昭法師の教よいふにせんさくの素の進食もれハ君が
ちりし教もれぬ事とよめり是ハ筑摩祭の端の教と
いふ凡信もれ也昔注凡ちりしきをかくしそ摩り婦女
と戒りしなり

○飛家必法よ茶枕の方より防風同眩と治すと云ふ

- 蔓荊子 五分 井菊花 五分 細辛 五分 吳白芷 五分 芍薬 五分
- 白木 四分 通草 五分 防風 五分 藁本 五分 羚羊角 五分
- 犀角 五分 黑豆 五分 石菖蒲 五分

右の茶細割し碎末とちりし生指の代りよ茶枕よ三月
の渡茶氣竭れしを換へし

○朝鮮の皇子とよき皇子よ後つて其を傳せしものなり

李退溪及び李珥の著述に其書畫依のりたり
聖賢のり、各々のりあり、大概出家のそふも日
極の心術よ及義よ礼法よとて、早しして身に力なく
孱弱より、侍人の躬庭、満への用より、之も豊臣
氏の一裁よ其徳長一方をも防きしや、かゝると、けりて
太刀をき、控へられし、朝鮮、東家の内、是程よきふり、と
りて、此書よられし、是程氏依も、たゞ、漢書よき、因に
たゞ、侍り、り、と、我ふの人の、あふり、

○東園栲父三十二番般若私法性寺觀音の像、一瓣の蓮
華よ、あ、て、摺をり、て、り、描き、る、に、水月一系、流、隔、等の

像、は、皆、一、瓣、の、蓮、花、よ、な、せ、し、む、又、氏、愛、智、那、公、等の、像、
並、を、畫、き、し、て、あ、る、像、の、後、あり、け、記、言、の、像、に、と、
ら、し、し、つ、ま、に、あ、る、の、像、に、古、き、像、あり、

○凡記言記多々の形像とて又一像の月杵形あり

○梵字のり

- 元觀音 冠 千手 元馬頭 元土面 元准胎 元不空罽素
- 元如意輪 元葉衣 元白衣 元多羅 元雙胎 元音預
- 元香王 元楊柳 元水月 元阿耨提 元來迎 元酒水

元梵筵

○以外、真、監、觀、音、の、り、て、此、故、事、の、南、麻、曼、陀、羅、の、り、

祝言の像さめ 智光愛得の愛相祝音はたきに宝珠
と持せり 其他和漢の像多し

○篆象の文字は栴花柳枝の形よりきなり なるは磁器
ちんどの器に用ひぬりの形よりけり なるは鼻の器
かきりしとけりぬ人の跡 なるはまのぬおの
書信の拙しとけり人のおけりせしとさもある
しきりとえりたるけりはいさむらとけりしき文と
しきりしとけりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
問我知るも むしきりし

○端午は長命缕の中袖巻とさるは五字けり酒

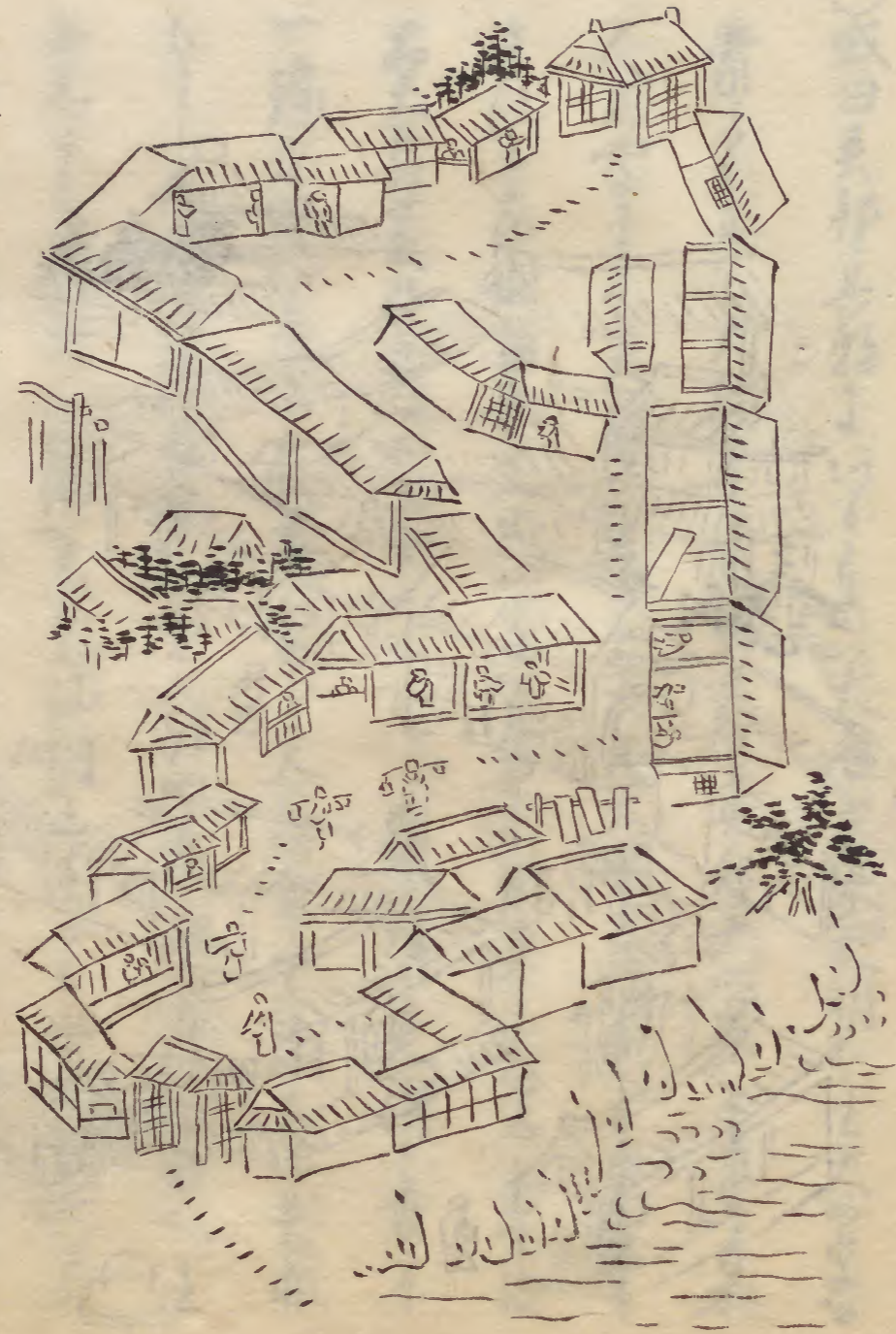
飾り茶おの言氏よあけりしとけり信と蛇の首とけりたる
よまといし飾りしとけり蛇の尾とけりしとけりしとけりしとけりし
蛇尾よりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりし
たど祝しとけりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりし

緬茄眼茄の王氏彙卷群芳譜滇南雜記などにあり
予けりし種し二三けりしとけりし半夏のけりしとけりしとけりしとけりし
しとけりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりし
さるあや

こゝに酒茹の圖有りといふべし。中書に書換とらんて
不見惜が

常政考

○三才圖會第五函宮室一は此等有り按をるに同里ハ
小宰の友府と云ふ有り。此れは周禮の同と明代の同
少異あり。但親文より里居とありは時代より刻ハ
遠くとも庶人の居るありは一きう我國町家と
りも府下庶人の集るる圖も又家園の町家も似たり
但唐の圖に高人のちきよ也



市井の圖も有り。鬻賣の家と云ふ有り。此れは唐
の制に似たり。揚州大坂の町家大概凡そきなり

あつた法皇の城に五町ありて此城より高人の
 寺ありてなりし



○或曰天邦其物よりもの大唐大宋大明なりと大の字を
 蒙りて大稱も前物とありては大の字と書き日本
 人もあきりて大の字を付て大元大明と稱しと云曰
 されと亦國古き文大の字を書き例多し今この序は
 右左其書名の可きありて。周の對は太漢と書けり
 一編は四の書名の其書も文はらざるもいとく是取
 たり又云洛陽長安を以て都の号とするは石書にと
 云ふより姑村の陽を以て仙洞とまるとゆげありし
 處もや古よりあるものと近年此書も我より一
 極難し傳ふこのりめや傳へん

○今の世跡といふ昔の封戸跡も蔵田位田等ありや
 その又跡と称せし布帛の類にして米穀より
 跡合を考ふるに米穀の類と云ふは京親王内親王
 妃夫人女御皇子等合せて米と云ふ類月料食料の類なり
 ○古く文武官人の料といひて又米より其の類あり
 文官一位は十貫文二位二十貫文等以下初位二貫文
 一貫文又武官は位に依りて十貫文位は九貫文より八位
 二貫の貫文より五貫蓋後世に法に依りて出費と
 是の法は古く武士に比し揚々として此の類と稱する
 ○考へて太平記に米倉の法ありと云ふは二万貫

一萬の米倉なりといふは法に依りて蔵田位田等の
 米と云ふなり

○古く國日の年給料

山城國公麻稻凡拾五万石凡稻五万石其年給守給下稻六万
 石介給下稻三万三千三百三十三石極給下稻二万六千
 石目給下稻一万六千六百六十六石史生給一分稻八千三百
 三十三石但史生三人合三方諸石准之に依りて大小上下
 有差あり載評干令義解等也

曰一町長三十歩廣十二歩稻米凡六百石也十町則六千石百町
 則五万石也然則國書に給地二百町也外位田八十町

山城上國上國之守 職田二町二反上國 從五位下然則位田八町 不置也 嗣後世

是成りのをあつて一凡國よ公田公解田職田位田

功田口分田等の名をかり又親王大匠の封をかり

是中世の在園少して國司の主維よりす不輸の

地より頼朝も備地を補してより昔の女

変せり後世は我修り切なり治りよ去地を領せり

こころよぶても備地改の号をたれてそ應じて家人

に地をよへ侍る長ふ年天下統一統の後を承りて

皆大樹屋下の命によりて願之中世の風俗より

今のときもあつて封建といへりさあつて花ふよ

つるしと信成と信成もそあつてあつて

○古國司の任

上總常陸上野の太守と稱せり親王の仕を承り

とす外記を歴つる人

伊予播磨の位上臈任り山江丹波の中凡早の案

山城大和の位六位志すは橋氏代り任り

飛騨隱岐後波を波對馬の位六位任り陸奥の守府

を兼るは一人の位六位任り近江越前丹波播磨

其位任り中後國防伊予隱岐の後但播磨の兼國

諸國極内舎人の任り下練りて文章生り任り北海

○西海練文法を蕃客し

右従二位を叙つ平基親の官職秘抄よるより先
古の制より中世以来いつれもまじく混じり
先王の法稍遠ひ傳りしりと國勢よれて日府の
を止めりし文治以来一變し徳仁文昭よ變極り

常
先王に
其アル故
不除

○朝廷辨舞の舞踏左右

或記云先代右の袖を之後右の袖に舞りし
又たよそ舞をまじると云堀川百首抄舞の言

柏木一推の巾枝を抄記に右左を伏せりしり

○左近右近の舞は下北苗しとのた紫宸殿の西なり右方の。なり

○天子の西方よりませはされよ反せり

○御衣司氏お宿し又きつとさしとより

○三浦道守臨陣舞も口位か将を平く古河の水を

よみてま

をの辰よりしをいほれは守の園もまたりあり

ぬて執奏ありて平此如くなりし平より子息君次而

強正少弼よ任せられし倭弁の酒ときき

○石清水神宮別当系図畧

紀兼弼

武内省祢十八世山城守兼弼二男
一曰兼井子也云

御園

源正大弼

御豊

石清水神宮居
後五位下

良範

神主二代口位上
自是代々お後

行教和尚 石清水用基 檢校大女寺 真濟僧正 益信僧正 後中尾 大師

安乘 石清水別當始 延晟和尚 外宮三代 大女寺 良常 神皇

聖清 我國法下始 枝真 神皇 定弼 神皇

安定 神皇 春實 神皇

以高代の由續一今之云て宗乳の供奉と 勅使は 源氏公等より 祠友の神皇系と外宮系と之更り大概ハ 佛子系の宗より傳之

○本紀 帝王本紀 雜氏本紀 庶氏本紀

右氏族三本紀 其他地神中記録 大己中命之後係

○系圖 神皇系圖 一卷 藤我馬子撰 帝王系圖 一卷 舍人親王撰

○續帝王系圖 一卷 菅原為長撰 帝王廣系圖 百卷 平基親撰

帝王系圖畧 一卷 卜部 皇胤紹運錄 二卷

諸家分脉系譜 十卷 菅原為定撰 和氣譜 一卷 清麿撰

大中臣本系 圖書寮諸氏系圖

記錄 神別雜氏記 三卷 新撰姓氏錄 三十卷

傳記 友氏傳記 一卷 大職冠 一卷

冷海公 一卷 武智磨 一卷

大政大臣源相后 一卷 倭天皇三子 大臣傳 六卷

大將傳 六卷 菅家 一卷

江家 一卷 紀家 一卷

小野 一卷

滋野 一卷

橋野訥言傳 一卷

良大訥言傳 一卷

吉佐傳 一卷

比介 善相公 野相公 等此傳多し 今抄共三

○本諸家の書籍多くハ散亡せり 義政將軍御書目より仁和より注文してをせしむる御書目凡六百六十二部入道大納言実方ハ承正三年八月師若本記の書目より之より以後跡せり 古本凡百餘部史より之より法家の記源相之傳より文是より倍も之り

○珍本源七節ハ長康安二年貞治元年撰波の文字 細川

相持守法氏ノ序 白峯の城合戦の時 康安元年

と云ふ我死す本村と云ふ 珍本氏ハ之ハ本費の武士

細川亦ノ序

口云は合戦より源氏と云伝中の士は軍方治の

柄と云ふ之は法氏の子と云ふと西頼院中の太平記

に在る柄の記は源氏と云ふと康安の記と云ふと

○諸家名記の類月或ハ唐名の发号を呼又ハ唐名を名にらしむるに違ふハ之を略すといふ

孝子部王記 武部ノ兼明親王の記なり

治相記 治と云ハ治相と云ハ互相是也 治は長

台記 丞相と三台と三長記の記

山槐記 山と中山槐と三槐中山内大臣

大府記 大府と大府の唐名大府の記

永昌記 永昌の唐名永昌の記

銅駝記 銅駝の唐名銅駝の記

平戸記 平戸平氏平戸の記

長秋記 長秋監の皇后宮大夫唐名皇后宮大夫師師の記

亞記 亞大納言の唐名大納言光祿の記

龍記 龍の中納言の唐名中納言光祿の記

右の記も書目多し一門庭の書或は此文多し唐名

事なるたて唐名多しと云ふことごとくもやもやと云ふ若
吳邦の友とあつてぬるものなりと云ふ冬後と八在と云ふ
朝庭と云ふもの程の長秋の八在と云ふ儀也云ふは
友貞冬後八人が一より一は号あり又宰相と云ふは
遠く侍れと云ふ冬後と宰相と称するものなり
上の雅よりやまはるもの記と云ふは俗に遠いなる人の
あつて侍るものなりと云ふは侍人の量のせりきり

一

○神名所見書なる神宇治の末流三加治海郡上世十二村の

内阿保院堂村より侍るもの記と云ふは一宗定村

神皇正統記宗弘と名ひし一人の在歟とて旧墟も傳り

○彼家の紋いなり友の内よ上を稱の條と云 神皇正統記

神皇正統記其と云ふは神皇正統記と云ふ事なり

○書肆よ和加諸傳傳あり是は和加添下郡筒井城と云

舜房順安及びひそき子傳後從五位下伊賀守定次秀吉の侍

羽軍氏と唱せり 曾代へのりて記せり此安姓は友系筒井也昭法宗

り長子に代り真福寺の元流なりて遠祖は平氏なりと云

大月と云ふり 驕りし者之應正元年三月廿日義政將軍筒井

隆舜房光宣法下筒井吉宗 少令して和加其糟宮と昔

より傳りし獲我入康る屍と京師よ入しむ

○天文十七年三月白山丸を奪ひ義忠傳昌虎とて此丸

にいらしむは村上三友齋舜功と云明人よ豊心丹の茶方

と傳授せしこれよりさきよ享保二年舜功我國使へり

は附薩品の傍寛妙房光淳九品より舜功と同松

形中よそは茶法を傳へて生國和加よ故り西大寺よりて

洞合一賣傳りて附は世同醫師稀賣茶師也なり

しは世人多く買求の是と西大寺茶と云えり

殊茶ありて沉麝田と稱し白山氏より神保某より

傳へし丸茶と豊心丹と云 光淳法師と傳壽上人と稱し西大寺二十八年の傳持

紀系譜を按ずるに重源信重重定他在處に元紀季重

り三男之弟西大友内りり、ゆきも不審時呼筒井氏

りと淳庵氏りして真福寺に供せしを考りしと中世

礼よ系一武をわひ大谷とあり我丹とありとし。○○○○

於ら我今よ既いしむるやにせし、あづまが然る光作と同

しし、つとむの承修よりありしは、筒井り、つとむ春よ、つとむ一し

南郊の商人恨極きて殺せし中より、つとむ井町の橋を度

友龍と、つとむ尉府合龍氏部、つとむ高よりし、つとむ一樓の

れとあり、つとむ自福ち二万の元元二千余人を介浪人及び

法師町人、つとむ百姓等、つとむ合まる余の惣とあり、つとむ筒井氏と、つとむ我

しるるに、つとむ比附南郊の氏家多く、つとむ焼亡し、つとむ町人の合對

は、つとむ号より始りたりし

○信よ姓と、つとむあしめて呼し、つとむ柿中、つとむ紀信正、つとむ其之

○三洲、つとむ法象の内、つとむ牧野ちる、つとむ元成定、つとむ柳永、つとむ少平大、つとむ稲垣

平、つとむ佐と、つとむ長、つとむ板倉、つとむ佐、つとむ佐、つとむ久人世

三田市、つとむ廣宣、つとむ井上、つとむ平右衛門、つとむ法秀、つとむ諸

各氏、つとむ切、つとむ援、つとむ奉、つとむの、つとむ勇、つとむ士、つとむあり、つとむ此、つとむ事、つとむは、つとむ幕、つとむりに、つとむ属、つとむせ、つとむり、つとむ諸

侯と、つとむ班、つとむせ、つとむり、つとむれ、つとむ西、つとむ月、つとむの、つとむ泉、つとむと

○元弘の始り、つとむ友、つとむ治、つとむ市、つとむ佐、つとむ尉、つとむる、つとむ系、つとむ智、つとむ品、つとむ切、つとむ安、つとむ法、つとむ部、つとむ佐、つとむ世、つとむ村、つとむと

願せし、つとむ此、つとむ世、つとむを、つとむ称、つとむ号、つとむと、つとむせ、つとむり、つとむ祐、つとむ隆、つとむの、つとむ高、つとむと

按あるに雲林院第4家石他也る那末ハ皆世の一族

云々

○尾州中務那大栖庄三福寺ハ徳信上人開基者二世法論

法親王娘村上院依一正平正平上院月言正平上院倫旨正平上院より勅取也

法堂内造営と云俗よ七堂今石古倉より移一と云

按るに勅取也の事さしつらん法堂の大嘗ハ一傳

○南船徴に云々せりふ上を糧ホの費よさ給一

是を流さるる一坊々大伽藍の造営いりてう傳るき

正和真福寺東院日記ハ人々を可考也

正平七年三月勅使光資系人系一條云御返事云御料

是事ハ而被遣二千丈於 勅使宿所之處之少之向

持系難義之由申之間以御使良空此外近日沙汰

雜匠候由之作之處左候者先可給二千丈申候間

次朝に遣り云嗚呼南方の所ありさぬ也びりて費

文の淺と奈良く清らせりすまぬり北船と云も

甚妻させり古記より由是利家天下に於て

治りせりれに末ハ貧窮のさぬ室所及日記等

の事

○口グーとも又ハ別のグーとも口付ハあるべき事ハ母の書

式三二刊古印宮など事也一ハ云々一に記す

津路山あふけに空よりありてまたさかきこす木の斤らき

右八宮之世酒經冊

カ十三
いかにのき澤ふれのみを院曇るぬ御代を於照まき
九形しきふいよ下つるの上とまきてりきこ古分ハトの
りどきげてかゝるり五例なりとて

○浄土宗増上寺等の檀林石化の在り同の清りさめく

りりそ略やん

名目頌義 二藏 選擇 小玄義 大玄義 文句礼

續論 浄土論

右八部各部一人ありて石化を指揮す

名目の石化三年ありて頌義石化となりて在り上り

正徳年より八部波た一をたよ即ち車十八檀林日一

○尾筋二宮大縣神社社主累系 家紋圈の白一引なり

社主古宅の地ハ打紙紙社主ハ勅使宿殿の地日一

ありと傳へ云

秀益 重松と庫外 秀満 比而夫 秀村 中哲五文明比

秀永 比五五末と 秀春 比五五三而

秀平平 根津中哲お浦始織田 秀富 有後在右近

女子 倉地と厚林妻

勝正 有合右山石匠 正時 比而

秀白井初上妻村城主

成正 叔味右左衛門始仕成田信雄の
後継外職成時家右衛門也

正行 叔味右左衛門
仕中川勘左衛門

秀久 叔味右左衛門
八十三歳

長治 叔味右左衛門
千代姫君

長光 叔味右左衛門
尾公

信元 叔味右左衛門

吉信 叔味右左衛門
万宮大福也

秀周 叔味右左衛門
母作徳安右左衛門
前中伯云光友は増進部族直揚位也

偏秀 叔味右左衛門

英利 叔味右左衛門
母細野四郎左衛門

英安 平岩十助

秀富 有友隆三助

○重松氏家系と失——或ハ搦と稱——或ハ友系と稱と

今按るに蓋尾張氏の庶流に曰條院曆仁元年十月

尾張國渚社中風願宣乃し同二年三月のり文り

中務那抄真子 尾張守尉尾張後村候名重松分一乗寺保

辛七町之辰大と云又云元禄十一年三月古凡と堀也

重松氏門 前田圃 是より尾張山守の口字之く傳り山守を世古と祖

の若母やいふ事と考ふるに元禄尾張氏ありり

け——旧事記述波縣君祖大荒田令云姓氏録曰建

尊三世孫大荒田令云傳り云尾張也云云大縣令下と

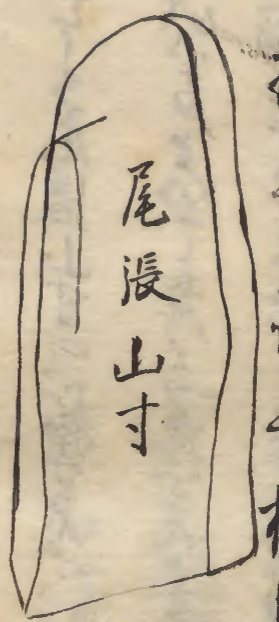
云云河良田と河賀田と相近——且縣君の姓尸も河良ハ

よびしころり日本武尊の吳と尾張省祢事紀を

社熱田 二世の孫孫臨坐の社勿れ尾張氏を以て孫と

とまらるり授ちきよゆり子橋氏ハ尾張小氏社勿き

二宮
古瓦
之圖



非之古宅の地を小計と稱し
又尾張氏の表地なりと云ふ

○尾張小府宮祢之中傳連ハ天方男令の裔之曆心

二年八月久田宰相房宗政死して子幸徳九郎と

とあり久田孫之而之政是之建武四年二月揚麻宣一

是之代々お経公略記之

秀將 祢之長門也
文明記

秀定 久田孫也
仕于斯波家

秀守 稱號也長つち天交中車
葵園松下記書也

成海 甚八市或稱臨川成園
市源記也

秀光 臨川孫也帝屋御田信長公
勤軍多天三年中記也

秀正 世々孫也
長門也

秀信 甚八也
長門也

秀利 市九也

秀富 倉庫外正六位上
而故稱橋氏

安友氏友流あり共々友京姓と稱し但其一流中姓

安倍姓之と云 安友對するも秀信
云々の系也云々

安倍仲磨

泰平 臨守府將軍

朝仕 安友の孫也
而安友ト云云彼乾六女流押六女後改友丸

右京 武志所

兼平 安友の孫也
之流家譜の中より

按らに仲磨ハ中勢大浦安倍和守の子之又大御言

彰年の子もとり天平勝宝八年入唐の小天曆
六年正月唐より率せり我光仁帝宝龜元年
これより多野院即位の年迄凡二百三十九年
其方只二代なりしなり—定て世系とす—
たつるものなり—系系はかゝるものなり—

三種三年
○癸巳国六月十日府下の高泉我基所 天波や 九三番と云也古き井あり

此より塵芥を入埋梅雨の晴るに男共入て芥片
付しるをちをます一人入て良く—く不坐又一人の
男心えりて井よりしり先も又上り急ぎ家内
忠告なき急ぎ井入りと呼まかりかゝると云よさんん

古井より入れば先法とて多汲入て後りしゆこそおひ
にてはまに定りて命有す—とてお救を打入て入
おがもよりしりていまごらつきた—しりて入よ
とて多く汲入させ後りて二人とておらげ—が
あつちり死より先よ入—に二十は女の男の井より上り
てやがて死を後よ入—に廿七歳と云井中よそ即死を
他より得り傳へいふと教も沙傳らんしゆ—も是ら
とてく—お唐—ゆら実よつがれ井にまぢらぬが—
毒をまけりて人を害を況や汚塵穢芥の埋積りて衆
塞きと中嵐毒なり—んや井堀の先り冷らつと多く

入て撰定を教へたりし是亦格好の一なり西陽雜俎
にもはるなり

○天野新治而嘉勝ハ 神君を奉はて勇茂の若しある
一かりしがみりき山三河合戦に壇尾ももせと武論の
るりして浮世を捨山中に法をちいて出家一六宗と
法若くして多仏してりし後 神君尊きせまりと
由憐ありし友川の重正云
是より色今法を講も壇尾を法形乃
宗祖として之願を傳へたり

きふ松の驛普濟寺の西祖寒岩義尹禪師ハ後
名將院才二の皇子とや山門よりして元和尚の師兄

たりし元入宋して曹洞流の禪門を傳へぬ朝の後
義尹を法を文とらんすとをありしに元曰君ハ師兄
ハ王家之貧道は師の礼をせんや頼くは君宗よ
入て。にりて也師の不可を文ありと義尹諾して
宗よ入師曰法ハ一人に傳へり前よ元ありて我を
師と文を宗とを子よ傳へりんやと義尹其旨を傳て
ぬよ一は元の法を嗣人もと欲せしに元既よ迂化
せり一は法を嗣徳和尚よ法を文ありしとあり
熱田の山多寺西祖折言海義中禪師ハ義尹の由あり
義雲和尚の法嗣とや尾品禪刹大りしは寺と始と

一

○正徳四年甲午貢使の琉球人十月三日大坂を出上下船して一百七十人

薩摩中將右貴殿長政使を指揮して同日出帆伏見軍
人より千人馬式百疋備支百六十人込貨物百六十疋也

○或人云琉球の世系考と予先より尚徳紀事一篇を著
して其世代を書せし尚徳といは彼国と云

明朝冊立琉球中山世系

武寧 中山王察度世子 永楽二年冊封 思紹

尚己志 尚忠

尚志達 尚金福 實志達才金福率後志魯争立

尚恭久 布里才 景泰五年勅嗣王封 尚徳 天順七年嗣王

尚圖 成化七年嗣王 尚真 成化十五年嗣王

尚清 嘉靖七年嗣王 尚元 嘉靖三十七年嗣王

尚永 万曆四年嗣王 尚益 万曆三十二年嗣王

○薩摩列附庸中山王代々

日本慶長十四年 己酉明萬曆三十七年 清津家 大津君の命を

奉り中山の君を封て速く其王尚寧を虜りて是

を以て國東とす 台命ありて中山王と追封し

薩列の附庸となりし これより多季秋萬曆三十二年に以後彼

清高の爵位我國の封命を奉りて及び與那城王子、吾

大樹沖代始の御祭を献し金武王子、自嗣封を附し
 なる礼使にされし、女使奉使のり九月十日 柳宮
 運せしに法大を依しと云庚寅の女使薩摩家これ
 費用と糸を以て度又女王子東本打統を費せしむ
 とせし唯 大樹をかりし使ハ哲也川を以てせしとせし
 治津亦云中山王尚益壬辰のち薨せしるされハ光年
 中山王薨し世子喪きて清朝より冊封使を受台邦
 して於て三年の喪を待て彼國王嗣位の番を附しせし
 例治津亦云定重也此年法冊使彼出しと云しとて
 は殺女使國亦よゆき琉球王府使九月薩品庶子治也

十月 大坂より志記を 六月 大坂を發せし 七日 休大津 休言
 九日 休記 十日 休國系 十一日 休記 十二日 休池經附 十三日 休
 十六日 休畜 十六日 休新居 十七日 休見舟 十八日 休金志 十九日
 休九子 二十日 休蒲系 廿一日 休系 廿二日 休管根 廿三日 休
 宿江尻 宿新居 宿友沢 宿友沢 宿友沢 宿友沢 宿友沢 宿友沢 宿友沢
 宿友沢 宿友沢 宿友沢 宿友沢 宿友沢 宿友沢 宿友沢 宿友沢 宿友沢

○俗よ白子といふものあり生れぬるものして白毛たりは
 人妖よりりしとみ雜俎よりり命命が強醫説し是を
 社と云つしその女のまは祐婆といし周密の癸辛雜
 識より山附社と多く回回所買或云其腦中に有珠社
 日に文信の妻肌肉純白髪鬢髮友君のこゝろと命命り

しりきんと徐巽り胎育産化論褚氏り遺書等よりは
社日のりありと比山醫話

○齊友右史丈就與ハ收阜拔底の後叙君義景より容

食より天正元年八月十日義京牧少の時乃称坂よりて

○我死より

○諸葛孔明謚忠武侯忠義節操後世実無他比我朝羽林
楠公正成

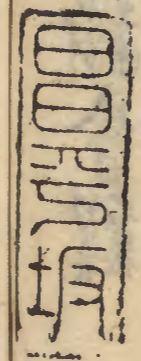
資質正大其規矩
似忠武侯

称

程子曰孔明有王佐之心張子曰孔明其體正大朱子

曰忠武侯天質高所為一書於公

恒尾卷才三十二終



慶應五

